

秋田雨雀のソヴェイエト経験（1927）

——ウクライナ・カフカス旅行における

西洋知識人との交流を中心に——

吉川 弘晃

[Article]
YOSHIKAWA, Hiroaki
UjakuAkita's experience in the Soviet
Union(1927)
(Received 1 September 2018)

A Noon of Liberal Arts, No. 9, 2019

はじめに

二〇一七年、ロシア十月革命百周年を迎えた世界各地では、学術専門書や関連書籍の出版、各種シンポジウムの開催が見られた。^{★1}しかしながら、こうした研究者の努力に反して、日本の一般社会での

ソ連史への関心は高いものとは言えないという。ソ連史家の富田武氏は続けてこの理由について、日本のロシア・ソ連史研究者が「日本あるいは日本人にとってロシア革命とは何だったのか」という問題を立ててこなかったからである」と述べている。^{★2}そうした問題を正面から扱うには、特に戦間期の日ソ関係史の研究が鍵になってくるだろう。

一方、近年の研究動向を一瞥するに、戦間期の日ソ関係に正面から焦点を当てる研究が増えている。その最大の理由は、ソ連崩壊後、

従来は西側諸国の研究者が使用できなかった大量のロシア側史料が公開されたことである。史料状況の改善は、日ソ両方の視点に基づいた実証的な日ソ関係史研究を可能にした。^{★3}代表的な成果として、富田氏によるモノグラフィや麻田雅文氏らによる論集を挙げることができ。^{★4}

とはいえ、先行研究の多くは政治・軍事・経済といった側面を扱う反面、文化面については十分に検討していないという問題がある。^{★5}冷戦期以来、日ソ関係史について、イデオロギー的背景も相まって、その対立面が強調されるあまり、一九二五年の日ソ国交正常化後に進んだヒト・モノ・情報の豊かな交流が見落とされているのである。

ここで日本とソ連という東アジアの地域枠組を越えて、同時代の世界的な背景に照らしてみると、その問題は深刻であるように思われる。というのも、欧米の研究では、ロシア革命が世界規模で与

えた価値観上のインパクトについてロシアと各地域を結んだ多くの知識人の文化活動の役割の大きさが、国際共産主義運動との関わりも含め、改めて関心の的となっているからである。^{★6} 無論、ソ連史家の池田嘉郎氏のように「ロシア史という縦軸」に従ってロシア革命史を捉えることは地域研究の観点から重要である。だが本稿では改めて、氏が相対化する「地域を超えた同時代的文脈」を重視する立場に立った上で、日ソ文化交流の一面面を扱うこととしたい。^{★7} 資本主義や主権国家を大きく逸脱する社会構想がほぼ困難となった現代世界で、そうした国際社会の前提を否定する理念を生み出したソヴェトについて、各国知識人がいかに国境を越えて実践したかという問いは、グローバル時代の歴史叙述において再考するに値すると思われるからである。

ロシア革命をトランスナショナルに繋いだ橋の一本は知識人の旅である。ソヴェトへの関心の高まりは知識人の筆のみならずその足をロシアへと向けさせた。革命や内戦でロシアへのアクセスが困難だった一九二〇年代初頭、知識人の実地観察に基づく旅行記やエッセイは貴重な情報源として各国世論で受容され、そのソ連像形成に大きく影響した。^{★9} 一方、そうした事情を理解していたソヴェト側は対外宣伝を目的に海外知識人へ積極的に接近を図り、彼らをロシアに招待したが、一九二七年の十月革命十周年記念祭（以下「革命記念祭」と称する）^{★10} はその最たるものであった。世界中から多くの知識人や活動家がモスクワでの式典に招待され、日本からも数人が参加している。

こうして世界の訪ソ知識人のネットワークは一方で出身地域とロシアを縦に繋ぐのだが、本稿が注目するのは、他方でソヴェトへの関心を同じくする訪ソ知識人同士に生まれた国境を越えた横の繋がりである。特に焦点を当てるのは、コミンテルンを成した各国共産党員の繋がりではなく、革命記念祭の参加者同士が国際会議やロシア国内旅行で交わした国境を越えた交流である。そこには参加者一人ひとりのソヴェト社会への認識や世界情勢をめぐる問題意識が現れた。^{★11}

ここで浮上する大きな問いは次の通りである。戦間期の日本知識人はこうしたソ連旅行を軸とするトランスナショナルな交渉をいかに経験し、それは彼らの問題意識にいかに影響したのか。本稿では、その問いへの最初のアプローチとして、革命記念祭への日本人参加者の中で唯一、旅行者同士の交流について詳細な記録を残した日本の文学者・秋田雨雀（一八八三―一九六二）の事例を検討する。本稿の目的は、秋田が帰国した直後に発表した旅行記事「カフカズ日記」^{★12}を中心に、革命記念祭後のソ連国内旅行における西洋知識人との交流を様々な形式及び言語で書かれたテキストをもとに再構成すると共に、その経験が彼らに互いにもたらした影響を明らかにすることである。

以下、第一章で秋田と彼の参加したソ連旅行の歴史的位置づけを確認して論点を整理し、続く第二章では現地旅行での西洋知識人との交流について秋田の旅行記、そして日記や回想録を西洋知識人のテキストと比較・参照することで再構成する。第三章では、秋田が

旅行中に西洋知識人との言語的コミュニケーションに支障をきたしていたことを指摘した上で、いかにして秋田はその問題を受け止め、またそれに対し振る舞ったかを明らかにする。

第一章 秋田雨雀とその時代

本章では秋田雨雀のソ連旅行の歴史的位置づけを行う。第一節では秋田の経歴と先行研究での扱いを概観し、続く第二節では彼の訪ソに至るまでの経緯について説明し、そして第三節では革命記念祭の概要とウクライナ・カフカス旅行の過程を明らかにする。

第一節 ソヴェト経験者としての秋田雨雀

秋田雨雀は大正・昭和時代に活躍した文学者である。現在も続く演劇雑誌『テアトロ』を創刊した劇作家であり、かつてはヒューマニズムの作風で多くの戯曲や詩、小説、童話を手がけた左翼作家として広く知られたが、坂内徳明氏や太田丈太郎氏の指摘する通り、秋田の名は今日、ほとんど忘れられている。そこでまずは藤田龍雄^{★16}の研究をもとに彼の活動の軌跡を追ってみよう。

秋田雨雀（本名は徳三）は一八八三（明治一六）年、青森県南津軽郡黒石町に医師の息子として生まれる。中学在学時より徳富蘇峰や二葉亭四迷、島崎藤村などの影響を受けて文学を志し、一九〇二年に上京、東京専門学校（同年九月より早稲田大学に改称）英文科にて坪内逍遙や島村抱月のもとで学ぶ。大学在学中の一九〇四年、新

体詩集『黎明』でデビュー、卒業後の一九〇七年には小説『同性の恋』を『早稲田文学』に発表し、早稲田系小説家として文壇での評価を得る。また同時期には新劇運動の代表小山内薫のグループに入り、戯曲の翻訳や批評、創作に携わる。一九一三（大正二）年には島村や松井須磨子の「芸術座」創立に参画、翌年には「美術劇場」を組織して自らは舞台監督を務め、日本演劇界で大きな役割を担った。

こうして明治末から大正初期にかけて文化人として一定の地位を確立する一方、ロシア革命後は社会主義運動にも積極的に関与した。一九二〇年代には日本社会主義同盟や日本フェビアン協会にて活動し、数度の検挙を受ける。一九二七・二八年には国賓としてソ連を訪問する。帰国後はプロレタリア科学研究所を設立し、自らもソ連に関する多くの論考や著書を出版することで、プロレタリア芸術運動の流行を背景に、日本社会におけるソヴェト文化の普及に努めた。★20

しかし、三〇年代の左翼知識人への弾圧によって言論活動の幅を狭めることを余儀なくされ、四〇年の検挙後はほぼ沈黙状態に入る。戦後は日本共産党に入党、創作及び言論活動を再開する一方、四八年には舞台芸術学院の校長、また五〇年には日本児童文学者協会の会長に就任し、広い分野での後進の育成に努めた。

約半世紀に渡る秋田の文化活動は大まかに言えば、これまで日本文学・演劇史や社会運動史といった分野において、日本国内の文脈でのみ検討されてきた。★21

裏を返せば、国際関係史の視点から秋田の活動を検討する試みはほとんどなされていない、ということでもある。なるほど、近年は日ソ文化交流史の立場から一九二七年の革命

記念祭を扱う研究が現れつつあるものの、その中でも秋田を正面から扱ったものは管見の限り、ほぼ皆無である。^{★22}

この原因は単純化して言えば、ロシア文化について素人であった秋田の訪ソ経験は、ロシア専門家として参加した他の日本人参加者の経験に比べて、積極的な関心も評価を得られていないからであろう。^{★23} それでも秋田のソヴイェト経験を取り上げる理由については本章第二節で改めて述べることにするが、そもそもロシア専門家ではなかった秋田は、いかなる経緯で国賓としてソ連に招待されるに至ったのか。次節ではこの点について秋田の回想録を参照しつつ明らかにする。

第二節 ロシアとの出会いからソ連訪問まで

秋田のロシアとの出会いはその青年期に遡る。世紀転換期、国内外の知識人と同様、トルストイの思想に共鳴し、ドストエフスキーやゴッゴリなどのロシア文学に翻訳を通じて深く親しんでおり、一九〇八年（二六歳）を回顧して「一体に文学といふものをほんとうに尊重するやうに私を教育してくれたものは、やはりロシア文学であった」と述べている。^{★24} もっともこの時点では秋田のロシアとの繋がりはテキスト上のものでしかない。ではいかにして秋田はロシア及びソヴイェトと直接、関わりをもつようになったのか。

秋田が身をもってロシアを経験する初めての契機たるロシア人作家エロシエンコとの親交については第三章第二節で述べるが、日ソ国交回復後の交流として重要なのが、ソ連作家ボリス・ピリニヤ

ク Борис Андреевич Пильник との交流である。^{★25} 一九二一年以降、

秋田は社会主義に同情的な立場から内戦中に発生して数百万の犠牲者を出したロシア飢饉への救済運動に尽力し、また日本のシベリア出兵に反対していた。一九二五年一月、日ソ中立条約によって正式に国交が回復されると、すぐに両国の文化交流も民間を通じて開始された。ソ連側は対外文化宣伝を目的とする「全連邦対外文化連絡協会」（通称 ВОКС、以下ヴォクスと称す）、^{★27} 日本知識人は「日露芸術協会」をそれぞれ窓口として交渉を行ったが、秋田は後者の中心メンバーの一人である。二六年三月にはピリニヤクを迎えて新劇や歌舞伎を鑑賞している。そして自らもロシア文化への関心を深め、同年末からはロシア語の学習にも取り組み、『ソヴエトへ！』先づ『ソヴエトへ！』の叫び声が、私の血を沸き立たせて呉れた」と回想している。^{★28}

こうした対ソ文化交流活動の過程でヴォクス日本支部長エウゲーニ・スバルグイン Евгений Генрихович Сральвин の知遇を得たことが秋田の革命記念祭への招待に大きく貢献したと考えられる。^{★29} 二七年五月には旅券交付の見通しが立ち、九月三〇日に東京駅を出発、下関、釜山、奉天、長春を経て哈爾濱で入国手続を行う。そこからシベリア鉄道でチタ、イルクーツク、ノヴォシビルスク経由で一〇月一三日にモスクワ到着、ヴォクス・モスクワ本部の人々やピリニヤクの歓迎を受けた。これ以来、二八年五月に帰国するまでの約半年間、ソ連に滞在することになる。

以上のように、秋田のロシア及びソヴイェト文化との関係は、ロ

シア地域研究というデイシプリンによって形成されたものではなかった。これに対して他の日本人参加者の多くはロシア専門家として訓練を受けていたのである。革命記念祭を訪れたのは、国賓としては秋田・米川正夫・尾瀬敬止・小山内薫^{★31}、秋田の秘書としては鳴海完造であつたが、秋田と小山内以外は全員、東京外国語学校（現・東京外国語大学）のロシア語学科での教育を通じてロシアの言語や文化についての専門性を身につけていたのであつた。

日ソ文化交流史を扱う先行研究の多くはロシア地域研究の観点から書かれ、そこではしばしば重視されるのは「いかなる水準で同時代のロシア文化を理解したか」である。そこでは確かに秋田のアマチュア性は深刻なネックとなる。実際、秋田のソ連観察は、彼の同行者でロシア文学を専攻する鳴海完造のそれと比べると、偏見や誤解、不正確な情報を多く含んでいた、またソ連体制を礼賛する一方でその暗部を見落としていたとして一部の研究者からは低い評価を受けている。★³⁴ ともそも、訪ソ前に「知識の第一歩から出発しなければならぬ」と感じた^{★35}と回想するように、何よりも秋田自身がその弱点を自覚していた。

とはいえ、当時の秋田のメディア的影響力を考えれば、その訪ソ経験は軽視されるべきではなからう。大正期から『報知新聞』や『時事新報』といった大手メディアに戯曲や評論を数多く載せていた秋田は、米川や尾瀬よりも、その国内メディアへの影響力は大きかつたと考えられるからである。事実、秋田は訪ソ中から朝日新聞社の為にソ連観察の通信記事を書き、帰国後の二八年九月に同社で講演

を行い、その内容は小冊子として出版されている。^{★37} 秋田は、地域や専門性を越えたジャーナリスティックな立場からソヴィエト社会を観察・評論し、一般世論でのソ連像形成に寄与するという点で「公共知識人 public intellectuals」の機能を果たしていたとも言い換えられよう。^{★38} 戦間期の西欧でのソ連文化宣伝に貢献したフランスの文学者ロマン・ロラン Roman Rolland もそうであつたように、そもそも各地域で影響力を有した訪ソ知識人は必ずしもロシア地域研究の専門性に基づいて発言していたのではない。本稿が秋田と比較するために第二章以降で取り上げる西洋の文学者ホリツチャーとカザンサキスも特にロシア語に堪能であつたわけではない。

第三節 革命記念祭とトランスナショナルな文化空間

(1) 十月革命一〇周年記念祭について

以上、秋田の訪ソまでの経緯を追ってきたが、ここで簡単に革命記念祭とその背景を整理しておこう。内戦と干渉戦争を切り抜け、国際関係の修復に乗り出したソ連は、一九二七年に再び内外に危機を抱えてしまう。二四年のレーニン死去の後、ボリシェヴィキ内では一国社会主義を唱えるスターリンやブハリンら「党中央派」と永続革命を主張するトロツキータち「反対派」が激しく対立する。一方、国際的には二四年の「ジノヴィエフ書簡」事件以来、英ソ関係が急速に悪化する中、ソ連国内では対英戦争への恐怖が高まり、穀物の買い占めや売り惜しみなどの社会混乱を生んでいた。^{★40}

こうした内憂外患に対し、党の結束とソヴィエト国家の力を国内

外に示すべく企画されたのが十月革命一〇周年記念祭である。^{★41} ポリシエヴィキが本式典を重視していたことは、幾つかの先行研究が述べるように、映画界からはセルゲイ・エイゼンシュテイン *Сергей Михайлович Эйзенштейн*、文学界からはイリヤ・エレンブルグ *Илья Григорьевич Эренбург* などの当代随一の芸術家を動員して

レーニンの「偉業」を記念する映画や文学を創作させ、さらにはヴォクスやコミンテルンを通じて大規模な国際宣伝を行なったことから分かる。^{★42} 革命の「聖地」レニングラードでは建物群がイルミネーションで彩られ、新首都モスクワ中心部でも建物が赤く塗られ、赤い壁が立ち並び、至るところで赤旗が翻った。そうした祝祭的な雰囲気の中、式典は一月六日から始まり、七日にはクレムリン前でスターリンやプーリンらポリシエヴィキ幹部がレーニン廟に立って赤軍、ピオネール、各労働団体、諸民族のパレードが夜まで続いたと秋田は記録している。^{★43}

知識人の交流という点で注目すべきは、一月一〇日に行われた第一回「ソ連の友」世界会議の開催である。ソ連は革命記念祭をより普遍的なものとして対外的に宣伝するため、世界四三ヶ国から九四七人の代表を国賓として招いた。^{★44} そこには各国の共産主義者や独立運動家、労働組合員の他、知識人や文化人が含まれていた。大会では「ソウエート共和国十年間の活動に就いて」と「資本主義的戦争の脅威に就いて」という二つの主題が設定され、両者について三日間講演と議論が続き、幕間にはエイゼンシュテインの映画『戦艦ポチョムキン』が上映されたという。^{★45}

以上のように、ソ連は東西南北からの多くの旅行者を招聘してモスクワに「インターナショナル」な空間を設けた。彼らはそれに加えてロシア国内旅行というもてなしを受けることになる。

(2) ウクライナ・カフカス旅行という経験

秋田たちは式典・世界会議を終えて間も無く、約二週間のウクライナ・カフカス旅行の機会を与えられる。「カフカス日記」によれば、二七年一月一六日、ヴォクス職員に「各国代表とともにウクライナからカフカス地方へ視察旅行に出発」するよう伝えられ、秋田は米川・尾瀬と共に同日夜、モスクワのホテルを出発したという。^{★46} まずは秋田の記述を頼りに旅行日程を確認しておこう。同月一七く一九日にハルキウ（ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国首都）及びその近郊、二〇日にハルキウ発、二二・二三日にバクー（アゼルバイジャン・同共和国首都）、二四く二六日にトビリシ（グルジア・同共和国首都）、^{★48} 二七・二八日にバトゥミ（アジャリア同共和国・首都）、二九日からは黒海を航海して二月一日にノヴォルシンスク港に到着。同月三日には汽車でモスクワに到着する。旅行者たちは集団で各地の史跡や文化施設、教育機関などを訪れ、宿泊先では現地有力者の歓迎を受けた。

この集団旅行について秋田と米川はそれぞれ大手雑誌に記事を残しているが、^{★49} 両者の筆致は大きく異なる。端的に表せば、集団旅行の経験を構成する二つの要素——旅先での風景観察と旅路での旅行

者間の交流——のうち、米川が前者にのみ記述を絞っているのに対し、秋田は後者を軸に記述している。

ここで我々は米川の「カフカズ雑記」を、ロシア地域研究者の視点に貫かれたルボルタージュとして読むことができよう。パトウミ・トビリシ・バクーの三都市での観察と印象が、専門性に基づく歴史・文化的知識と共に簡潔に記されている。さらにカフカズ旅行に対する参加者と主催者の問題意識を対比する冒頭部は極めて示唆的である。参加者の米川は「カフカズの雄大な雪の嶺や、絵のやうに美しい山麓の温泉場や、伝説的な山の乙女など」「そうしたレールモントフ式、乃至プーシキン式の浪漫的なカフカズ」を期待するのに対して、ヴォクス側は「我々遠来の客に美しい風景を見せて旅情を慰めようという事でなく、言語風俗の異なる各種の民族が、共通の目的のために一つの聯盟に結合してゐる有りさまを、事実の上に示さう」とする。^{★50}ここでバクーの風景を「どこか殖民地らしい粗野な感じ」^{★51}「全てがアジア的気分であり、退嬰民族的情調である」と称していることから、米川のカフカズに対する視線は、一九世紀ロシア文学が生んだ、ロマンティックなカフカズ像をそのまま踏襲していることがうかがわれる。^{★52}本記事に見られる米川の現地でのコミュニケーションはあくまで日本人とカフカズの諸民族との間のものに限られている。

これに対して秋田の記述はまさに「日記」の形式を取り、日々の出来事が雑多に書かれているような印象を受ける。それにもかかわらず本稿にとって重要なのは、秋田は記事全体を通じて、名前や会

話の内容を交えつつ、各地での旅行者同士の人間関係を極めて具体的に描いているという点である。秋田は記事冒頭部で「作家のエストラテ」、「ギリシヤの詩人カザン・サツキ」、「ホリツエル博士」、「キントーノ博士」、「ヘレーネ女史」、「クライン」、そして「ドイツ語、フランス語、英語を巧みに語る美しい娘さんの「カマラード」とゲンキン君と、その友人のロシア人」と、出発地に集う旅行参加者を列挙した上でこの空間を「各國語の驚くべき交響楽」と表現している。^{★53}

このようにソヴィエトという問題を抱えて東西から集った知識人がそれぞれの言語で交流する、いわば移動式のトランスナショナルな空間を秋田は強く認識していた。この点にこそ秋田のソヴィエト経験の独自性が、そしてまた彼の経験に注目する意義が存在するのである。第三章の議論を先取りすれば、これは秋田自身の外国語能力へのコンプレックスと、それに由来する言語の壁への強い問題意識に関係している。では、そもそも多言語の奏でる「交響楽」、すなわち彼らのコミュニケーションは、秋田及び西洋の知識人のソヴィエト経験にいかなる痕跡を残したのか。

次章ではこの問題について、上記の登場人物のうち特に「ホリツエル」と「カザン・サツキ」という二人の西洋知識人との関係に注目して立ち入る。二人を選んだ最大の理由は、いずれも同時期にソ連に招待されてこの旅行に参加し、さらにその経験を一九二八・二九年に文章にしており、秋田のテキストとの比較可能性が高いからである。

第二章 東西からの旅人たちの視線

本章ではカフカス旅行での秋田と西洋出身の二人の文学者との関係性について論じる。第一節ではドイツ出身のホリツチャー、第二節ではギリシヤ出身のカザンザキスとの関係が扱われる。各節では文学者の略歴とソ連旅行までの経緯を示した上で、各人が残したソ連旅行に関するテキストと秋田のそれに見られる交流の痕跡を比較することで、共にカフカスを旅した三者の認識の関係を明らかにする。

第一節 アルトゥール・ホリツチャーの場合

(1) ホリツチャーのソ連旅行

アルトゥール・ホリツチャー Arthur Holitscher (一八六九—一九四二)は、ハンガリー生まれのドイツ語作家である。^{★54}ブダペシュトのユダヤ人商人の家に生まれてドイツ語で教育を受け、オーストリア・ハンガリー帝国内の諸都市で銀行員を勤めた後、一八九〇年代より小説の執筆を始め、また多くのエッセイや戯曲を残した。秋田と同様、今やドイツ国内ですら殆ど顧みられぬ文学者だが、二〇世紀前葉、ホリツチャーは多産かつ人気を誇る旅行作家であったという。彼の名を高めたのは一九一二年の合衆国旅行記『アメリカ今日と明日 *Amerika Heute und Morgen*』であり、^{★55}本作はフランツ・カフカの未完の長編小説『失踪者 *Der Verschollene*』における多く

の細かい点に影響を与えたと言われる。しかし、一九三三年のヒトラー政権成立後はパリへの亡命を余儀なくされ(ユダヤ人作家である彼の著書は焚書の対象となる)、第二次大戦開戦後の生活は困窮し、四一年にジュネーブで客死した。

ソ連との繋がりについては次の二点を述べておきたい。まず、ホリツチャーは十月革命後のロシアの状況を早い時期にドイツ世論に伝えた知識人の一人であったという点である。内戦が続く中、一九二〇年に通信員としてソヴィエト社会を観察し、翌年にこれを『ソヴィエト・ロシアでの三ヶ月 *Drei Monate in Sowjet-Rußland*』にまとめて出版した。次に、彼は二〇年代から独ソ文化外交の担い手として活躍していたという点である。そもそも、ホリツチャーは若い時代に無政府主義の影響を受けた左翼知識人であり、第一次大戦中には社会主義運動や反戦運動に関わっていた。大戦後の二一年、同じ左翼知識人のヘレーネ・シュテツカーと共にドイツでのロシア飢饉救援活動に携わり、広告塔の役割を果たした。また、二二年四月の独ソ国交回復(ラバロ条約締結)後もゾオクスとの文化交流のドイツ側窓口「新ロシア友の会 *die Freunde des neuen Rußland*」の機関紙に寄稿している。^{★57}こうした独ソ文化交流に果たしたメディア知識人としての役割を見るに、彼が二七年の革命記念祭にドイツ代表として招待されるのは当然の流れであったと言える。

ホリツチャーの一九二七年の訪ソ経歴は、二種類のテキストに反映されている。一つ目は回想録「ロシアの祝祭 *Das Fest Rußland*」は二八年に雑誌『ノイエ・レントシヤウ *Die Neue Rundschau*』に記

事として初めて掲載され、同年すぐに他の旅行記事と併せて『旅
Risen』に収録された。^{★58}筆者自身の訪ソまでの経緯やヴォクスの説
明から始まり、式典のパレード、「ソ連の友」世界会議、現地観察
と続き、最後にカフカス旅行が取り上げられる。もう一つのテキス
トは小説『それはモスクワで起った *Es geschah in Moskau*』（一九二九
年）である。^{★59}ここでは物語の内的分析は行わないが、簡単なあら
すじを附しておこう。「ロシアに行くことになっていて、既に招待
されていた」イギリス人記者「ホリツチャー氏 *Mr. Holtscher*」と「私
ich」を語り手かつ主人公として、^{★60}世界革命とトロツキーの赤軍に
強い憧れをもつアメリカ人女性記者との旅を軸に、モスクワに集う
知識人や活動家たちとの国境を越えた交流、そして訪れる先々で目
にする内戦の傷跡や社会の貧困といった革命の影の部分が描かれ、
最後は女性記者がソ連の実態を前に涙を流して泣き出すという場面
で締められる。

これら二つのテキストからホリツチャーの訪ソ経験を再構成する
場合、ノンフィクションである前者はまだしも、フィクションの形
式を取る後者をそのまま歴史史料として用いるのには注意が必要で
ある。とはいえ、フェーリングスが指摘するように、本作には、ホ
リツチャーの二七年までの数度に渡る訪ソ体験が、具体的な人名や
情報が「コード化」された形で至るところに散りばめられている。^{★61}
そして特筆すべきは、本作の舞台の中心となるモスクワの邸宅――
明らかにソ連政府が用意した外国人招待客向けの宿泊施設のこと
である――では、各国からソ連に集まった様々な人々の「奇妙に混雑

した国際社会」が展開されているという点である。ここには現実上
でホリツチャーが経験した旅行者同士のトランスナショナルな交流
が形を変えて反映されている可能性が存在する。従って、この小説
の記述から筆者の訪ソ経験をそのまま再構成することは不可能であ
るものの、少なくとも経験の痕跡を部分的に見出すことは決して不
可能ではなからう。

このように、ホリツチャーもまた秋田と同様、対ソ文化交流への
関わりからソ連に招待され、現地でのトランスナショナルな交流を
二つのテキストに書き残した。以下では二人のテキストを実際に比
較して彼らの認識を追っていかう。

(2) 秋田とホリツチャー…双方向的な眼差し

まずは秋田のテキストに見られるホリツチャーの姿を見ていく。

「カフカズ日記」ではホリツチャーは「ドイツ人」詩人として紹介
され「日本に来たことのある人で日本に関する著述がある」と続く。^{★62}

これは、一九二〇年代半ばにホリツチャーがアジアを旅した際の
旅行記『穏やかならぬアジア。インド・中国・日本を巡る旅 *Das
unruhige Asien. Reise durch Indien-China-Japan*』（一九二六年）のこと
であろう。次に二七年一月二九日の日記では「大きな団体の立派
な人物とされている」「三宅雪嶺に似ている」といった、ホリツチャー
の風貌に関する印象が見られる。このように秋田は日本との繋がりを
示しつつ、その後も旅行記及び日記でホリツチャーの言動に度々、
言及しているが、最も印象的なのは次の別れ際のシーンである。カ

フカスから黒海を経てノヴォロシースク駅に到着した一二月一日の日記である。

トルメンの珍しい絵はがきを手に入れた——二枚買って一枚をドイツのホリツェル博士に送った——ホリツェルはぼくの詩がほしいというので「自然の人を」の歌をホンヤクしてやつたら頬べたへあたたかいキッスをしてくれた。^{★64}

(Nature killed men, Men killed men, o darkness! Everywhere darkness, When shall we see the sun shine?)

このように秋田の記述から読み取れるホリツチャーへの眼差しは肯定的であり、両者の国境を越えた交流の終幕は麗しく締められる。

それではホリツチャーの方は秋田をいかに捉えていたのだろうか。まず前項で述べた彼の二つのテキストのうちで旅行記「ロシアの祝祭」の方を見ると、そこには秋田の姿はほとんど見当たらないことが分かる。「ソ連の友」世界会議と呼ばれた各国代表が列挙される箇所では「秋田、日本のプロレタリアート詩人 *der japanische Barte des Proletariats*」と記^{★65}されるのみで、秋田自身や彼との交流について踏み入った記述は見られない。二人のノンフィクションのテキストだけを見る限りでは、両者の眼差しは秋田からホリツチャーへの一方向的なものに過ぎなかったように見える。果たしてホリツチャーにとって秋田は特筆するに足らない存在であったのか。

しかしながら、もう一つのテキスト『それはモスクワで起った』

に目を向けると、この理解は必ずしも正しくないことが判明する。それを示す二つの場面を次に挙げる。

一つ目は、主人公「ホリツチャー氏」が邸宅内で初めてインド人と共に日本人詩人を目にするシーンである。

一人の若い日本人もまた卓についていた。とても背が低く、華奢で、長髪で、短く刈り揃えた口髭を備えていた。彼はテーブルの端に座っていて、話しかけられると、そのインド人のように笑いながら、誰に対してもその柔らかくて微かな声で英語の単語を囁いていた。^{★66}

二七年一月四日の秋田の日記には、ヴォクス本部に招待された際にフランスのバルビュスと「ちよつと英語で話した」とあるように、英文科で教育を受けていることもあり、秋田は簡単な英語を話すことができたようだ。小説ではこの直後、件のインド人共々、秋田を指すと考えられるこの「日本人」と「私」は親しく交流するようになる。そしてこの日本人詩人「アラスガ Arusuga」が猫を抱いて部屋に入り、これと戯れる様が微笑ましく描かれる。^{★68}

ここまでの描写では「アラスガ」は優しい、東洋の文人に過ぎないが、もう一つ目のシーンでその印象が一変する。「私」を含む招待客たちが「トゥルキスタン出身のコミッサール *Kommissar aus Turkistan*」から、敵の將軍たちの虐殺や反革命者の処刑といった内戦中の凄惨な経験を聞く場面である。

日本人アラスガは一枚の紙を前に置いてノートをとった。垂直に並ぶ細くて小さな日本語の文字が間も無く紙を覆った。優しく、愛嬌ある笑みを浮かべる日本人詩人、そうそれはアラスガ、日本の苦しめられた、隷属せられた、沈黙する農民プロレタリアートの詩人は、鎮座して、恐ろしい報告にじつと耳を傾けていた。^{★69}

ここで「私」の関心は、「森で、広野での人間狩り wille Jagd auf Menschen durch die Wälder, über die weiten Felder」と表現されるコミッサールの戦闘の語りよりも、猫を見つめる時と「まさに同じその優しい笑みを浮かべてこのぞっとする報告に耳を傾けて」いたアラスガの方へと向かい、次のような印象を残す。

私にとり、ぞっとさせる、血生臭い行為の数々は、政治的な必要性によってのみならず、その魂の中に必要性、そして蜂起の手段と目的によって意識が生きていた、この日本人がここにいることによって正当化されねばならぬようにも思われた。^{★70}

この引用箇所の直前で報告のおぞましさは秋田の微笑みによって帳消しにされたと記されているものの、この場面では、革命の理念と目的を理解しつつも、その手段がもたらす流血と悲惨を前に葛藤

する「私」と、コミッサールの暴力的な行為をありのままに聞く「アラスガ」が対比されていることは確かである。

別の箇所についてフェーリダースも指摘するように、本作ではロシア革命及びソヴェイト体制への完全な礼賛とは言えないホリツチャーの態度が仄めかされるが、^{★71}上記の二場面では「アラスガ」と「私」の描き分けによって、それがなされている。ホリツチャーは革命直後からソヴェイト社会を十年近く観察し続け、その光だけだけでなく、やがてはポリシエウイキ内紛争といった影も目にしていた。それに対して秋田は初めてソ連を訪れてその光だけに目が行きがちであり、さらに帰国後もソ連体制寄りの記事を書き続けることにな^{★72}る。こうした二人のソヴェイト経験の差異の一端が、ホリツチャーの眼差しを通じて明らかになる。

本節を小括すれば、一方で秋田とホリツチャーは双方向的な眼差しを向けており、それらは両者の記述に反映されていることが明らかとなった。他方で、両者の認識の間には、彼らのソヴェイト経験の違いに由来する革命やソ連体制への温度差が存在することが判明した。

第二節 ニコス・カザンザキスの場合

(1) カザンザキスのソ連旅行

ニコス・カザンザキス Nikos Kazantzakis (一八八三—一九五七) は近現代ギリシャの国民的文学者として知られる。^{★73}クレタ島北部の農家に生まれ、一九〇六年にアテネ大学法学部を卒業

後、パリ大学にて世界的な影響力を誇った哲学者アンリ・ベルクソンのもとで哲学を学ぶ。第一次大戦中に鉱山業に手を出して失敗するが、その経験は代表作『その男ゾルバ』（一九四三）の題材となった。大戦後はカフカスやロシアのギリシャ難民帰還事業など政府事業に携わるが、二〇年代にドイツで共産主義の強い影響を受けて公職を離れ、二五年に特派員として初めてソ連を訪問する。その後、二七年一〇月に革命記念祭に招待されて再びロシアの地を踏む。^{★74}この時からおよそ二年近く行動を共にするのが「エストラテ」ことフランス語作家バナイト・イストラティ Panait Istrati（一八八四～一九三五）である。^{★75}ルーマニアに生まれ、社会主義運動と諸国放浪の日々を経て、スイス滞在中にフランス語を習得し、同時代から世界的な名声を誇ったフランスのロマン・ロランにその才を見込まれてデビューする。『キラ・キラリナ Kyra Kyralina』（一九二三年）の出版で一躍、フランス左翼文壇の寵児となる。その後忘れられた作家であるが同時代には、秋田も記すように「バルカンのゴリキー」として江湖に通っていた。^{★76}イストラティはロランやアンリ・バルビュス Henri Barbusse らと同様、当初はポリシェヴィキに好意的な態度を示しており、フランス代表として革命記念祭に招待されていた。カザンザキスとイストラティは二七年一〇月から約二ヶ月間のロシア滞在を経て、共にギリシャに戻って講演会を行うが、そこで官憲にポリシェヴィズム宣伝の咎で告発されたため、二八年四月に再びロシアに向かう。しかしながら、この旅は両者のソヴィエト経験に大きな傷跡を残し、^{★77}二八年末までに両者は別れてロシアの地を

去って西欧に戻る。その後、カザンザキスは共産主義に幻滅して別の方面で自らの文学と思想を形成する路を選び、イストラティはソ連体制告発の筆を揮ってフランス左翼知識人から孤立、不遇の中で世を去った。^{★78}

カザンザキスは自らのソヴィエト経験をもとに、一九三四年にフランス語の小説『トダ・ラバ *Toda Raba*』を出版した。^{★79}本作はモスクワの革命記念祭へと向かうべく世界各地から集まった登場人物が織りなす群像劇の構成を取っている。そこでは多国籍の登場人物によって、世界革命やソヴィエト社会をめぐる問題についての議論、男女の出逢いと別離のドラマが展開される。その背景にはカザンザキスが旅したカフカスや中央アジアの風景が据えられ、そして革命のもたらした社会的悲惨が所々に埋め込まれている。クライマックスの革命記念祭では諸民族のパレードが熱気をもって描かれ、登場人物の口々から官僚化していくソ連体制への不満が述べられる。本稿はあくまで秋田と西洋知識人のコミュニケーションの痕跡を扱う以上、ここでは本作の細かいプロットを論じることはない。以下では秋田とカザンザキスの記述に見られる両者の交流の痕跡を探っていく。

(2) 秋田とカザンザキス

秋田におけるカザンザキスへの眼差しから見ていこう。まず、カザンザキスとイストラティが共に行動している様は秋田の眼にも映っていたようで、「カフカズ日記」の記述にそれは見られる。

一九二七年一月二六日、トビリシのホテルで「国民文学会」が開かれて各国代表が詩の朗読に対して秋田も含めて感想を述べた後、彼らがトビリシを去る際に「美しい女性の詩人達が一行を追ひかけてステーションまでやって来たので、バルカンのゴリキーやカサン・ザツキは大はしやぎをしてゐた」とある。^{★80}カフカスにおけるカザンザキスの言動への秋田の言及はこれ以外には見るべきものはない。

しかしながら、注意すべきは秋田がカフカス旅行とは別の場所です。自作品を巡ってカザンザキスと談話しているということである。日記から確認されることだが、革命記念祭前の二七年一月一日、ゾオクス本部を訪れた秋田は「カザン・ザツキ」に会い、また翌日彼の訪問を受けて「色色質問をお互にかわした」という。^{★81}そして、一月四日にもカザンザキスの訪問を受けており、彼は「メリー嬢（論者注：現地のロシア人で秋田らの通訳・案内役）に「幼児の殺戮時代」の解説をきいて筆記していった」とある。こうした記述からは、一見、秋田がカザンザキスに対して、トランスナショナルな文化交流を一定程度、積極的に試みているように見える。

それではカザンザキスの眼差しには、秋田との交流、そして彼の作品の「筆記」はいかなる形で現れているのか。ゲオルギアトウによれば『トダ・ラバ』の登場人物のモデルは、カザンザキス自らやイストラテイなどのモデルが存在しており、主要人物の一人で日本人詩人「アマタ Amia」のモデルは秋田だと思われる。^{★83}本作品の第一章では、世界からソ連に向けて発つ登場人物がその背景や故郷と

共に次々と現れていくが、その中で「アマタ」は以下のように、中年の日本人文人として登場する。

アマタ、白髪交じりの詩人は、原稿の上に身をかがめた。繊細な手で、上から下までくまなく書いた長い詩行に。小さくてみずばらしい、殺風景な部屋。本が数冊、小さな水差し、黄色いカナリア。部屋の奥の黒く塗装された棚の上に、黄金の細長い仏陀像が微笑んでいた。長い脚で胡坐をかき、膝の上の青い蓮が色褪せていた。^{★84}

カザンザキスの著作に見られる秋田の痕跡をめぐって決定的に重要なのは、アマタが「茫洋たる青い日本海」が見える部屋に佇む風景が描かれた次の記述である。

アマタは詩行を書く。演劇であった。春の日に十三人の子供たちが芝生の上で遊び、声を合わせて歌っている。無骨で素朴な十三人の兵士たちが息を切らして突然姿を現した。彼らは狩っている、人間を狩っている。子供たちを見て、一人が言った。

——命令を聞いたか？

別の一人が答えた。

——ああ、だと思っぜ……。

——じゃあ殺してしまおう！

兵士たちは少し身をかがめ、彼らの右腕を振って、十三人の子供たちを打ち殺した。それから誰かが言った。

——命令なんてなかったんだ！

十三人の兵士たちは各々の盾で小さな死体を覆い、出立した。なだらかな、花咲く丘を登り、頂上で少し立ち止まってから、再び歩み始め、どこかに消えていった。

その後で、小さな子供たちが盾を持ち上げ、観客の前でお辞儀して言った。

——泣かないでくださいね！ 作り話ですよ！ 作り話ですよ！ ただの演劇なんだから。^{*85}

ここで描かれる「アミタ」の戯曲は一九二四年四月に秋田が雑誌『我観』に発表した「幼児の殺戮時代」の内容を思わせる。^{*86} 前年九月の関東大震災後、大杉栄などの社会主義者の殺害、そして何より朝鮮人の虐殺を目撃して秋田はこれに憤激する。すぐさまこれら

を題材とった一連の戯曲を発表することになるが、そのうちの一つが本作である。藤田の指摘する通り「幼児の殺戮時代」は表現主義の型式を取り、大部分が合唱と詩で構成された戯曲である。^{*87} 島根で

平和に暮らしていた一三人の子供達たちの前に不穏な空気が走り、唐突に出現した兵士たちが一人ずつ理不尽にも子供を殺していき、それを嘆き呪う母親たちが我が子らの蘇生を祈るといふ話である。

まさに上に引用した内容とはほぼ一致していることから、カザンザキスの秋田との交流の痕跡が明瞭に浮かび上がる。また、『トダ・ラバ』

の結末部に当たる第一六章は、革命記念祭に集った主人公たちがモスクワ中央の諸民族のパレードを見守るといふものである。行進を目の前に感情を昂ぶらせる「アミタ」は「それは死の踊り *la danse de la mort* ではない」と叫んでいる点にも注意したい。^{*88} この台詞は朝鮮人虐殺を直接扱った戯曲の表題「骸骨の舞跳」を強く連想させる。

「アミタ」は『トダ・ラバ』において、技巧ばかり凝らした芸術に嵌り、美しい理想を求めめる人物として登場し、中央アジアの生活の貧困の現実を目撃して大いに衝撃を受けていく様が第四章以下で多くの頁を割いて描かれていく。この点に当時のソ連体制に賛成していないカザンザキスと秋田の姿勢の対比を見出すためには、より精緻なテキストの比較と分析が必要であるため、これ以上の両作品の内在的検討はひとまず措こう。

いずれにせよ本節の考察から、秋田とカザンザキスのテキストの比較を通じて、両者のコミュニケーションの痕跡が双方に存在することが判明した。ただし、ホリツチャーとの関係と比べて次の点に注意する必要がある。秋田とホリツチャーはソグイェト経験の差異による相互の認識の違いは存在するものの、両者のテキストに等しく交流の痕跡が残されている。これに対して秋田とカザンザキスの交流については、前者のテキストにあまり反映されていないものの、後者のテキストには明瞭かつ強烈に刻印されている。つまり、相互の交流が両者に与えた影響は非対称的であったことが分かる。ここ

から両者の互いへの関心の高低を推察できるが、ここではあくまで
テキスト上の事実の確認にとどめておく。^{★89}

それでは、カフカス旅行というトランスナショナルな空間における
知識人同士のコミュニケーションは具体的にいかなるものであつ
たのだろうか。第三章では特に言語面での交渉の困難性という点か
らこの問題を扱う。

第三章 西洋知識人との交流における秋田の困難

前章では東西からのソ連旅行者の交渉とその影響について複数の
テクニストに見られる相互認識を検討しながら明らかにしたのに対
し、本章では旅行者同士のコミュニケーションの困難性を言語問題
の点から検討する。第一節では秋田の感じていたソ連での言語コ
ミュニケーション不全を明らかにし、続いて第二節ではそれを解決
するために秋田が人工言語エスペラントに期待して自らもそれを実
践していたということを明らかにする。秋田がトランスナショナル
な空間で抱いた矛盾について言語の視点に着目して論じること、
秋田のソヴィエト経験の独自性を浮き彫りにする。

第一節 東西の旅人を隔てる壁

前章第一節で述べたように、秋田にとってカフカスを渡る旅行集
団は「各国語の驚くべき交響楽」であったが、すぐ後に彼はこう付
け加えている。「然し交響楽は人類の最大の不幸の一つだ」。^{★90} 秋田自

身はあからさまに自らの無能を述べてはいないが、彼が少なくとも
カフカス旅行中には西洋知識人とほとんどコミュニケーションを取
ろうとしなかった、または取れなかったことを示すカザンザキスの
証言がある。彼がロシア旅行中にギリシャ語で残した手記、特にカ
フカス旅行の箇所には「秋田はいつも隅っこに座り、無口で微笑ん
でいて、そしてタバコを吸っている」という記述が見られる。また、
トビリシからバトゥミに戻る際の秋田は「嬉しげに貝殻を集めてい
る。常に喋らない」という様子であったという。^{★91}

ゾオクス本部でこそ、秋田は通訳を通じてかろうじてカザンザキ
スと交流できたが、ドイツ語とフランス語が飛び交うカフカス旅行
では彼を含めた西洋知識人との交流には困難をきたしていた可能性
が以上の記述から伺われる。

それでは秋田にとって「人類最大の不幸」に響いた「交響楽」は
いかなる言語空間に起因したのか。まず、旅行者同士の間では主に
三つの言語が交わされていた。「カフカズ日記」によれば、ゾオク
スの案内役兼通訳の男女二人組は「ドイツ語、フランス語、英語を
巧みに操」って対応していた。^{★92} また現地人との会話について、ハル
キウの「文部省」を訪れた際には「ドイツ語のできる一革命家が純
粋なそして温和な表情で小ロシア語を一語づつドイツ語に翻譯して
行」った一方で、トビリシのホテルではグルジア共和国の「鼻の高
い教育人民委員（文部大臣）」がフランス語であいさつしたとい
う。^{★93} 参加者はホリツチャーやシユテツカーといったドイツ語使用者
とカザンザキスやイストラタイといったフランス語使用者の二大集

団に別れており、ついに両者は対立を始めたことが二七年一月一九日の記述からうかがわれる。

ハリコフ市から二十七キロのペレーシチナ村を訪ふ（中略）

ここでドイツ語側とフランス語側と代表者達の間に軽い争ひを生じたのは、私にまた言語の問題を考えさせた。⁹⁴*

すなわち二七年の時点で、旅行者間で飛び交う欧米語のうち、英語がかるうじて使えるのみであった秋田にとって、ほぼドイツ語とフランス語のみで構成された空間でのコミュニケーションは不都合だった。ロシア語を使用できる秋田以外の日本人旅行者が通訳や現地人と会話可能であったとすれば、カフカス旅行での言語的困難性は秋田の孤独さをさらに増幅させたであろうと考えられる。

それではこうしたトランスナショナルな交流における言語上の困難を抱えた秋田はいかに具体的な対策を講じていったのか。次節ではこの論点から秋田のソヴィエト経験の独自性を位置づけたい。

第二節 人工言語エスペラントという希望

前節で述べたような国際交流における言語上の困難は、必ずしも秋田の個人的体験の枠で収まる問題ではなかった。一九二〇年代は国際連盟やコミンテルンをはじめ、国境や官民の別を越えた団体が国際的に大きな存在感を発揮する時代であったが、国際会議での使用言語が深刻な問題になったことは言うまでもない。二〇年代当時、

公用語はほとんどの場合が西洋言語に限られていたからである。そこで西洋言語を母語とする人々に対する、そうでない人々の言語上のハンデを克服する手段として期待されたのが人工言語エスペラントであった。

ここでこの言語の歴史的背景をリンズの研究に基づいて簡潔に整理しておこう。⁹⁵★ エスペラントとは一八八七年にポーランドの医師サメンホフが考案した人工言語である。世界中の人々のコミュニケーション手段として、できる限り文法を単純に、必要語彙を抑えて作られた。一九〇五年に初の世界エスペラント大会が開催されて以来、世界各国の知識人に新たな共通言語として広まりつつあった。一方、エスペラントはインターナショナルな反政府運動の手段として、あるいは現地の言語文化への脅威として各国当局に監視を受けたり、弾圧を受けたりすることが多かった。

エスペラントへの圧力は第一次大戦後も続くが、一方で当時の様々な立場の国際主義からの追い風を得ることになる。国際連盟ではフランス語・英語が公用語として通用していた状況に対して、新渡戸稲造によって二一年、エスペラントの公用語化案が出される。しかしながらフランス政府の強力なキャンペーンによってその試みは挫折する。これに対して、同時代にエスペラントの公用語化の計画を進めたのはソヴィエトであった。帝政時代は迫害を受けていたエスペラント運動は、ボリシェヴィキ政権には翻って好意的に受け止められ、二〇年代初頭には国内の授業科目として提案されるよう⁹⁶★にまでなった。ソヴィエトでのエスペラント運動は同年代半ばには

全盛期を迎え、国境を超えた労働者同士の交流手段としての拡大が目指された。だが、三〇年代に入るとソヴィエトのエスベラント団体内の路線対立が激しくなり、スターリニズムの強化に伴って運動は衰退していった。

日本及び秋田との関係については、一九〇六年に日本エスベラント協会 (Japan Esperanto-Instituto、以下 JEI と称す) が発足、参考書も出版されている。秋田のエスベラントへの関わりは、ロシア人作家 ヴァシリイ・エロシエンコ Василий Рикович Ерошенко との出会いから始まる。一九一五年 (三三歳) 二月二日、秋田が来日したエロシエンコを迎え、彼が「盲人でありながら、世界のエスベラント運動のために熱心に働いていること」を知って感銘を受けたことが始まりであった。翌日には当時、エスベラントの学習を始めて「三月ほどではこの言葉を会得した」という。^{★98}以降、彼と行動を共にしていく秋田は、自ら参考書の出版に関わるなど、日本でのエスベラント運動の主要人物の一人となっていく。^{★99}しかし、ロシア革命を経てロシア人のエロシエンコは日本では要注意人物扱いされ、二一年五月のメーデーに秋田と共に参加したため検挙、国外追放となる。

こうした背景のもと、秋田は「友の会」世界会議においてエスベラントの公用語化に関する提議に熱心に動んでいたことを日記に残している。^{★100}世界会議を含めた国際社会でのソヴィエト・エスベラント運動と知識人の関わりについては本稿では深くは立ち入らない。以下では、秋田がエスベラントを通じてウクライナ・カフカス

旅行で、いかなる西洋知識人との交流を経験したのかを論じる。

同旅行で秋田はオーストリア出身の「クライン氏」^{★101}というエスベラントイストと積極的に交流している。例えば、「カフカス日記」の二七年一月二一日の記述ではハルキウからバクーの間において、「オーストリアのクラインは私を訪ねて来て、「君が(ダンツォ・デ・スケルトイ)の著者と同人だとは昨日まで知らなかった。」^{★102}といって私に握手を求めた」という。「ダンツォ・デ・スケルトイ Danco de Skeltoj」とは、二七年に秋田が JEI から出版していた『骸骨の舞跳』のエスベラント翻訳版である可能性が高い。^{★103}人工言語を通じてトランスナショナルな交渉が十分に行うことができた秋田は後に以下のように回想している。

私はこの時、自分の作物に対して少しの自信も自負心も持ってゐなかつたが、この言葉及び言語の創始者に対して深い感謝の情をいだかされた。^{★104}

また、同様に指摘しておきたいのは秋田によれば、クラインはエスベラント訳で読んだ秋田の戯曲「スダラの泉」をカサンザキスに翻訳して聞かせてやったということである。^{★105}エスベラントは秋田とカサンザキスの文化的交流に間接的な影響を与えていたことが推察される。

この後、文化面や私事に渡るまで秋田はクラインと何度も会話したことを記録している。

このように確かに存在したエスペラントを介した知識人同士のグローバルなコミュニケーションは、秋田独自のソヴイェト経験であったと言える。この後、二八年に入ってソ連各地の教育機関を訪れ、秋田は日本人参加者の中で唯一、ソヴイェト・エスペラント運動及び教育についての記事を執筆することになる。^{★106}

このように西欧主要言語を使えない、あるいはこれを苦手とする秋田のような問題意識とエスペラントへの期待は、西洋知識人には共有されていなかった。それは秋田と交流したホリツチャーの言語観からも分かるだろう。「友の会」世界会議では多国籍の参加者に「配慮」して、ロシア語、フランス語、英語、ドイツ語、中国語の各国語に翻訳されていたが、その様をホリツチャーは以下のように述べている。

通訳のうちには翻訳の天才がいるものの、核となるスローガン *Kernsprüche* をナンセンスな決まり文句 *nichtssagenden Floskeln* に変性させる危険なほどに無学な者もいる。大切なのは雰囲気だ。大切なものは、互いに面と向きあって *Sicht-an-Angesicht-zu-Angesicht-Sehen*、握手を交わす（中略）ことだ。^{★107}

この点からは、第二章第一節で述べたホリツチャーが自身と秋田との間に認めたソヴイェト認識をめぐる温度差とはまた別の論点が浮かび上がる。すなわち、一九二七・二八年当時、革命の暴力性や官僚化の進行といったソ連社会の負の部分にホリツチャーは気づい

ていたのだが、秋田はソ連の社会や制度を礼賛する一方であった。これに対してソヴイェトをめぐるトランスナショナルなコミュニケーションにおける言語問題に目を向けると、逆に秋田が問題を深刻に捉え、ホリツチャーはこれを認識していなかった。

おわりに

以上、ソ連旅行におけるカフカス旅行という一期間、それもロシア国外から訪れた東西出身の旅行者同士の交流に焦点を絞り、その上で彼らの残した多様な複数言語のテキストを比較・検討することで、秋田のソヴイェト経験を国際的な位置づけを試みてきた。その成果として少なくとも次の二点を挙げることができる。

第一に、ソ連旅行という共通の経験において知識人同士が残したトランスナショナルな交流と、それが彼らの経験へ相互に残した痕跡を独自の手法で発見したことである。本稿で取り上げた秋田、ホリツチャー、カザンザキスの三者のテキストは従来、一国単位の歴史学や文学研究の中で扱われてきた。これに対し、本論は歴史的背景としてソ連の対外文化政策について確認した上で、そこから生じる「ソヴイェト経験」という補助線によって三者のテキストを結んだ。次に秋田の残したテキストを他二者のものと比較・検討することで、ノンフィクションの形態を取るテキストから、彼らの現地での交流や相互認識のあり方を可能な限り再現したばかりでなく、フィクションの形態を取るテキストから、秋田との交流が西洋知識

人のソヴェエト経験に与えた影響の痕跡を指摘した。もっとも歴史的には後者のような「痕跡」は過去の「事実」の有無を一対一で判定するものにはならないだろう。また、本稿の取り上げる事例は、革命記念祭を中心に各国知識人が織りなした蜘蛛の巣の一片に過ぎない。しかし、マルチリンガルなテキスト比較によって発見された「痕跡」からは、これまで忘却の淵にあったミッシング・リンクの存在がうかがわれよう。

このように、異なる言語や種類のテキストを歴史的背景に即して比較・検討することは、単に文化・文学史上の新発見をもたらすだけではない。第二に指摘できる成果は、秋田のロシア革命及びソヴェエト社会への認識を、他の日本人参加者とだけでなく、西洋知識人と比較することで、秋田のソヴェエト経験を新たな視点に基づいて位置づけ直せるようになったことである。具体的にはまず第一章第二節にて、秋田を専門知識人（ロシア地域研究）の見地から否定的に評価するのではなく、公共知識人（ジャーナリスト性）から捉え直すことを提唱した。西洋の訪ソ知識人の事例に見られるように、一九二〇年当時、ソヴェエト経験とそのメディア発信は、必ずしもロシア専門家だけのものではなかったからである。もっとも本稿においても、ホリツチャーやカザンザキスに比べてソ連社会の光と陰の両方にバランス良く目を向けられていないという点で、やはり秋田はソ連体制の礼賛者を演じてしまったことは否定できない。^{★108}しかしながら、秋田はソヴェエトをロシアという地域固有の問題ではなく、文化の違いを超えて論じるべき普遍的な問題として向き合った。

地域研究者とは違ってロシア語が使えず、また西欧言語にも通じていなかった秋田であればこそ見えたものがトランスナショナルな空間での言語問題であり、それはソ連でのエスベラント運動への期待へと繋がっていく。そしてこの点にこそ秋田の経験の独自性が存在すると言えないだろうか。

右のような成果が見られる一方、多くの課題が残されている。まず、本稿では革命記念祭を訪れた日本知識人のうちで一個人にのみ焦点を絞ったが、これだけでは戦間期日本知識人のソヴェエト経験の全体像を把握することできない。今後は秋田以外の訪ソ経験者について調査を進める共に、個人間の関係から集団間の関係へと視点の転換を図る。具体的には第一章第二節で言及した日露芸術協会の活動を日ソ双方の史料に基づいて明らかにし、秋田や米川、尾瀬といった知識人の位置づけを改めて行いたい。^{★109}

次に本稿が扱うソヴェエト経験は、国外からの訪ソ知識人同士の交流だけに絞られ、日本知識人のソ連観察及び現地人との直接の交流それ自体は対象とならなかった。戦間期の日本では多くのソ連旅行記や関連書籍・記事が執筆または翻訳されているが、差し当たり、日ソ国交回復から革命記念祭後までの時期に対象を絞った上で、ソヴェエト文化の日本での受容について分析を試みたい。

以上、今後の課題と展望の提示をもって今回は擧筆とする。

★1 例えば日本のロシア・ソ連史研究者の最大の成果として、岩波書

店が同年にかけて出版した研究論集『ロシア革命とソ連の世紀』シリーズ全五巻がある。

- ★2 富田武「ロシア革命と日本人」『思想』一一九(二〇一七年七月)号、九頁。

- ★3 例えば、日本政治外交史家の酒井哲哉氏は、東アジア国際政治史の観点では戦間期のソ連の東アジア外交の重要性は「半ば自明な事柄」であったが、史料制約が研究の大きな壁となっていたと述べる。麻田雅文編『ソ連と東アジアの国際政治』みすず書房、二〇一七年、二〇三頁。

- ★4 富田武『戦間期の日ソ関係』岩波書店、二〇〇八年。前掲麻田編『ソ連と東アジアの国際政治』。

- ★5 その意味で例えば、一九二八年の市川左団次一座のソ連公演を挙げ上げた永田靖、上田洋子、内田健介編『歌舞伎と革命ロシア』森話社、二〇一七年は貴重な研究である。

- ★6 例えば、戦間期のソ連との文化交流におけるフランス知識人の動向を扱ったモノグラフィとして、Stern, Ludmila, *Western Intellectuals and the Soviet Union, 1920-1940*, New York, 2007 がある。なお、文化面だけに焦点を絞ったものではないが、国際共産主義運動についてヨーロッパでの展開を中心に、新たな史料とトランスナショナルな枠組から再考した論集として、Weiss, Holger (ed.), *International communism and transnational solidarity: radical networks, mass movements and global politics, 1919-1939*, Leiden, 2017 がある。

- ★7 池田嘉郎『ロシア革命』二〇一七年、v、vi頁。

- ★8 「ソヴェエト」と「ソ連」の名称区分については次の立場を取る。

一九一七年一〇月にロシア・ソヴェエト共和国が成立して、二二

年一二月にザカフカース・ウクライナ・白ロシアのソヴェエト共和国と共にソヴェエト社会主義共和国連邦が成立する。この経緯を踏まえ、二二年末以前についてはソヴェエト、それ以後はソ連と称する。ただし、ポリシエヴィキ政権下のロシアで成立した文化については「ソヴェエト文化」と称することにする。

- ★9 冷戦後のソ連文化外交の研究の進展を踏まえた、知識人のソ連旅行及び旅行記とそのグローバルな視点からの再評価については次を参照。Cœuré, Sophie, « Les Voyages entre l'URSS et l'Occident », *Les Cahiers Strive* 16 (2016), pp. 116-126.

- ★10 ポリシエヴィキは自らの正統性を示すため、一九〇五年革命や十月革命を記念する祭典を二〇年代から積極的に行っていった。以上を挙げ上げたモノグラフィとして、Coney, Frederick C., *Telling October*, Ithaca/London, 2004 がある。

- ★11 戦間期にソ連を訪れたドイツとフランスの知識人を比較し、彼らの旅行経験を再現すると共に、そのソヴェエト観やそこに現れる問題意識について比較を行ったものとして、Oberkamp, Eva, *Fremde neue Welten*, München, 2011 がある。

- ★12 初出は以下の通り。秋田雨雀「カフカズ日記」『中央公論』一九二八年八月号、二三一〜四〇頁。翌年に他の多くのソ連関係の記事と共に、秋田雨雀『若きソヴェエト・ロシア』(叢文閣、一九二九年)に同題で収録された(二二九〜四四頁)。本稿では前者を用いる。

- ★13 秋田の日記は死後、彼の女婿・上田進(ロシア文学者)の弟・尾崎宏次(演劇評論家)の編集を経て、未来社より全四巻で初めて刊行・公開された。全四七冊の日記は一九一五〜六二年分が残されたが、本論はソ連旅行期が含まれる第二巻(一九二七〜三四年

分)を特に参照する。秋田雨雀『秋田雨雀日記』(第二巻)、未來社、一九六五年。日記の刊行及び編集の経緯については、同前、一〜六頁。しかし、六頁の「凡例」で「日記中の長文のロシア語、エスペラントの記録は、必要と思われる以外はこれを除き」という記述には史料上の注意を払うべきである。秋田の国際的な活動を扱う本論において、ここで除外された記録はむしろ重要な可能性が残るからである。この点については改めて秋田日記の原史料を参照した上で、別の機会に論じることにする。

★14 秋田の回想録は、秋田雨雀『五十年生活年譜』ナウカ社、一九三六年。なお、後者について戦後に三〇年代以降の部分を加筆したものが『雨雀自伝』の題で新評論社から一九五三年に出版された。両者を確認したところ、五三年版の三三年六月分(一九一頁)までは三六年版の記述が流用されている。二〇年代までの秋田の言動を扱う本稿では、同時代史料である前者を用いた。

★15 *Finnish Tokyaku* (坂内徳明), *Ojiri Monnen в Восточности в 1928 г.*, *Hiroshibashi Journal of Arts and Sciences* 54-1(2013), C.19. 太田丈太郎『ロシア・モダニズム』を生きる』成文社、二〇一四年、二八一頁。

★16 本節での秋田の経歴については次に収められた「秋田雨雀年譜」の詳細な記述に依拠している。藤田龍雄『秋田雨雀研究』津軽書房、一九七二年、二八七〜四八一頁。本書は今もなお、戯曲・詩・小説・童話といった幅広い秋田の芸術活動を包括する、ほぼ唯一のモノグラフィートとして欠かせない。

★17 坪内逍遙(一八五九〜一九三五)は日本の小説家・劇作家、英文学者。創作活動に加え、シェイクスピアの翻訳・研究でも知られ、近代日本文学・演劇の発展に貢献した。なお秋田のデビュー作『黎明』には序文を寄せている。

★18 島村抱月(一八七一〜一九一八)は日本の小説家・劇作家・文芸評論家。文芸誌『早稲田文学』の主権者として自然主義文学運動を、坪内と「文芸協会」を設立して新劇運動をそれぞれ主導するが、スペイン風邪により死去。

★19 小山内薫(一八八一〜一九二八)は日本の劇作家・批評家。東京帝大時代に同人誌『新思潮』を創刊して西洋演劇の翻訳・紹介に努め、自らも第一次大戦後に渡欧して演劇を学ぶ。二代目市川左團次と設立した「自由劇場」は文芸協会と共に新劇運動の拠点となった。「築地小劇場」の設立者としても知られる。秋田や米川との訪ソの直後に急死。

★20 ここで秋田の日ソ文化交渉への関わりは一過性のものではないことを指摘しておきたい。例えば、一九五三年一月末の秋田の生誕七〇年を祝う会にてソ連代表ロージンと交流している他、同年一月八日には日ソ図書館での米川正夫歓迎会、五七年九月二五日にはソ連大使館でのボリショイ・バレエ団のパーティー、五九年一月七日には同大使館での革命記念祭、六一年一月一九日には日ソ協会五周年記念祝賀会にそれぞれ出席するなど、晩年に至るまでソ連との関わりは続いた。前掲藤田『秋田雨雀研究』四四九、四五二、四六五、四七一、四七六頁。

なお、一九六〇年代にソ連で出版された『演劇事典』と『簡易文学事典』には秋田の記事が設けられており、いずれにおいても二七・八年の訪ソについて言及されている。Moruyevskii, G.G. (главный ред.), *Театральная энциклопедия*, T.1, Москва, 1961, C.110. Сурков, A.A. (главный ред.), *Краткая интерпретивная энциклопедия*, T.1, Москва, 1962, C.117.

★21 近年では関東大震災後の朝鮮人や社会主義者の殺害を扱った作品についての研究が見られる。中沢弥「〈死の舞踏〉を踊る人々」『湘南国際女子短期大学紀要』一〇(二〇〇三)、一四六—一三六頁。
津久井隆「関東大震災を描くということ」『国文学研究』一五〇(二〇〇六)、早稲田大学国文学会、八一—九一頁。

★22 例外として次の二つの研究が挙げられる。秋田のロシア民話の翻訳活動と彼の童話創作に与えたロシア文化の影響を扱った、南平かおり「児童文学者としての秋田雨雀とロシア文学…童話「鷹の御殿」と『露西亜童話集』をめぐって」『ロシア文化研究』二三(二〇一六)、早稲田大学ロシア文学会、一七—三八頁。そして、ソ連滞在中の秋田のペラルーシでの農村観察を論じ、彼の日記の該当箇所のロシア語訳を付したものととして『*Famuli, op. cit.*』がある。しかしながら、後者は秋田のペラルーシ旅行に論点にのみを絞っており、ソ連旅行全体はおろか、カフカスでの経験は扱っていない。

★23 例えば次のような研究は、ロシア地域研究の立場から、革命記念祭で現地を訪れていた日本人の動向やネットワークについて詳しく論じている。太田丈太郎『ロシア・モダニズム』を生きる『成文社』、二〇一四年。笠間啓治、「小説『道標』の人々—一九二七—二八年冬モスク(二)」(柳富子編著『ロシア文化の森へ』ナダ出版センター、二〇〇一年、五五—六九頁)。

★24 秋田はドストエフスキー『罪と罰』を英訳で(一八八五年にシカゴ Laird & Lee 社から出版された Frederick Whistaw による翻訳: Fedor Dostoevsky, *Crime and Punishment* などと思われる)、ゴロリキー『二狂人』(『カルコ集』春陽堂、一九〇七年所収)、ゴロリ『狂人日記』(『乞食』彩雲閣、一九〇九年所収)、アンドレイエフ『血

笑記』(易風社、一九〇八年)を二葉亭四迷による翻訳で愛読していたという。前掲秋田『五十年生活年譜』、二四—二五頁。

★25 ボリス・アンドレーヴィチ・ビリニャーク(一八九四—一九三八)はロシア・ソ連の作家。その前衛的な作風で「同伴者作家」の代表格として知られた。体制批判の態度を取ったため「日本スパイ」として粛清された。

★26 日本でのロシア飢饉救済運動についてはグローバルな見地から再検討する必要がある。ゾオクスの前身組織は、全世界的に進められた飢饉救済運動のために設けられ、海外からの救援組織の受入と彼らへの対外宣伝を行っていたからである。David-Fox, Michael, *Showcasing the Great Experiment*, Oxford / New York, 2011, pp. 30-34. この問題については別の機会に改めて扱う予定である。

★27 ロシア語表記での正式名称は Всероссийское общество культурной связи с заграницей。ロシアを訪れる外国人の接待と各国での文化交流の促進を目的に一九二五年、トロツキーの妹オリガ・ダヴィドヴニャ・カメネヴァ(一九四一)を会長としてモスクワに設立された。戦間期のゾオクスの西洋諸国向け活動の包括的研究は、デイヴィッド・フォックスによる *Idem* を参照。

★28 前掲秋田『五十年生活年譜』、一二四頁。

★29 エヴェーニー・ゲンリホヴィチ・スバルザイン(一八七二—一九三三)はロシアの日本学者。ロシア帝国のサンクトペテルブルク大学で東洋学を修め、世紀転換期に日本に留学した後、ウラジヴォストクの国立極東大学や東洋学院での教育に従事する。多くの日本語教材や日本研究書を著して帝政・ソヴェト時代に渡ってロシアの日本研究をリードするのみならず、ゾオクス日本

支部長を務めて二〇年代の日ソ文化外交にも大きな役割を果たした。スバルウインの生涯については *Ермакова, Э.В. / Дубосский, А.С., Е.Г. Стальман: страницы биографии Дубосского, А.С. (пер.)* *Первый профессиональный японцевед России, Владивосток, 2007, С.7-35*。

★30 この点についてはソ連側の史料から改めて検証する必要がある。少なくとも二五〇七年の秋田の日記や回想録には大使館でソ連行きを便宜を図ってくれた人物として「スバルキン教授」の名前が頻出する。注目すべきは、秋田の旅行前、大使館を通じて彼の戯曲「幼児の殺戮時代」(初出『我観』一九二四年四月、翌年に戯曲集『骸骨の舞踏』叢文閣として刊行)がロシア語に翻訳されてゾオクス会長カーメネヴァに送られていたということである(前掲秋田『五十年生活年譜』、一二六頁)。秋田とカーメネヴァのモスクワでの交流については、同時期にソ連を訪れた日本知識人の事例と共に別稿で論じたい。

★31 米川正夫(一八九一〜一九六五)は日本のロシア文学研究者。ドストエフスキーやトルストイをはじめとする多くのロシア文学の翻訳・研究で知られる。二七年当時は陸軍大学のロシア語教官を務めていた。

★32 尾瀬敬止(一八八九〜一九五二)は日本のソヴェエト文化研究者。日露芸術協会の設立に寄与し、芸術や教育、経済、農村文化と広くソヴェエト文化を紹介する文献を戦前・戦中・戦後に渡り一貫して著し続けた。

★33 鳴海完造(一八九九〜一九七四)は日本のロシア文学研究者。秋田の同郷人でありロシア語に堪能なことから彼に同行。日本語講師として一九三六年までソ連で研究活動を行う。現地でのプーシ

キン関係文献の蒐集は現在も高く評価される。日ソ文化交流の研究において見直しが進む人物である。例えば、青森県近代文学館編『鳴海完造と秋田雨雀』青森県近代文学館『二〇一二年』。

★34 同前、一頁。前掲太田『「ロシア・モダニズム」を生きた』二八二〜四頁など。

なお、笠間氏による秋田への批判は正当なものとは言えない。革命記念祭は党を追放される直前のトロツキー派にとって最後のデモンストレーションの場でもあり、一九二七年一月七日の式典でも彼らの抗議活動が見られたことは近年の研究でも知られていく(Faget, Jean-François, *Les commémorations du X^e anniversaire de la révolution d'Octobre, Carnets de bord no.12 (2006), p.32*)。ソ連で笠間はバルミンやドイツチャーといったソ連から亡命した反スターリン派の人物の回想録や伝記からトロツキー派の抗議活動を強調する記述を持ち出し、これに対して秋田の日記ではパレードに見とれて「政治的緊張の片鱗さえ感じない」と批判している(前掲笠間「小説『道標』の人々」一九二七/二八年冬モスク(二)」、五六二頁)。しかしながら、第一に、事件の後から書かれた回想録と同時期に書かれた日記を比較することは史料操作の上で、大きな問題を含んでいる。また、ポリシエウイキ内の対立問題について秋田はエロシエンコを通じて少なくともその存在自体は認識しているし(前掲秋田『秋田雨雀日記』(第二巻)四三頁)、さらにその事件が党機関紙『プラウダ』で掲載されたことを出版物の中でも記載している(前掲秋田『若きソヴェエト・ロシア』、二六八〜九頁)。従って、秋田の態度がソ連体制寄りであったにせよ緊張の「片鱗さえ感じない」という評価を下すのは早計であると考えられる。

- ★35 前掲秋田『五十年生活年譜』、一二五〜六頁。
- ★36 前者は現在の『読売新聞』。当時、両紙は『東京日日新聞』や『國民新聞』『東京朝日新聞』と共に大正時代には大きな影響力を有していた。
- ★37 秋田雨雀「ソウエト・ロシアの芸術概観」（刀禰館正雄編『最近の英露支』朝日新聞社、一九二八年に所収）。本記事は二八年五月の最近外国事情講演会」の速記録をもとにしており、後に『最近のソウエト・ロシア』帝國教育会出版部、一九二九年に再録された。帝國教育会は戦前の日本の教育者・教育関係者による全国機関であることを踏まえれば（同会の二〇年代までの活動については、帝國教育會編『帝國教育會五十年史』帝國教育會、一九三三年）、秋田のソウエト経験は左翼以外の人々にも広く読まれていた可能性が考えられる。
- ★38 歴史社会学者の竹内洋氏は、学会報告や学術論文の発表といった専門性を前提としたアカデミズム内でのコミュニケーションに専念する専門知識人に対して「公共知識人」を「誰もが考えなければならぬ政治・経済・社会・文化問題に対して、専門家にむけてではなく、知的公衆に意見を具申する知識人」として定義している。公共知識人は古来より存在するが、「活字メディアや中等・高等教育の発展を通じて本格的な市民的公共圏が確立する時代（日本では昭和初期）に、彼らの社会的影響力が急速に拡大したという（竹内洋『大衆の幻像』中央公論新社、二〇一四年、九六〜七頁）。本稿も原則として、竹内氏の以上の理解に従うものとする。
- ★39 「ジノヴァイエフ書簡」とは、ポリシエヴァイキ幹部のグレゴリー・ジノヴァイエフ（一八八三〜一九三六）がイギリス共産党に宛てたとされるもので、その内容は英国内での親ソ宣伝や革命工作、総選挙での労働党支援を呼びかけるものである。書簡が英報道機関にリークされると、対ソ融和策を取ったマクドナルド労働党政権の信用は失われ、ポールドウイン保守党政権の成立に利した。近年には同政権は対ソ国交断絶に踏み切る。書簡は現在では偽書の可能性が高いとされる。カー、ロ・エ（塩川伸明訳）『ロシア革命』岩波書店、二〇〇〇年（原著一九七九年）、一一三頁。
- ★40 ギル、グレイム（内田健二訳）『スターリニズム』岩波書店、二〇〇四年（原著一九九八年）八〜一〇頁。
- ★41 グレゴリオ暦一九一七年一月七日（ユリウス暦では一〇月二五日。本稿では以後、グレゴリオ暦表記を用いる）『ロシア共和国（二月革命後に成立した臨時政府）首都ペトログラードで、ポリシエヴァイキの指導下で労働者・兵士による武装蜂起が発生、翌日には臨時政府のあった冬宮が制圧される。この日はロシア十月革命とロシア内戦の出発点として記憶されるようになる。
- ★42 Comey, *op. cit.*, Ch. 7 (pp. 175-99). Fayet, *op. cit.*, pp. 28-32.
- ★43 前掲秋田『若きソウエト・ロシア』三〇〜三二頁。
- ★44 Fayet, Jean-François, VOKS: The Third Dimension of Soviet Foreign Policy: in Gianow-Hecht, J.C.E./Donfried, M.C. (ed.) *Searching for A Cultural Diplomacy*, New York, 2010, p. 42.
- ★45 前掲秋田『若きソウエト・ロシア』三三〜四二頁。
- ★46 前掲秋田『カフカズ日記』二二九頁。
- ★47 ウクライナ語ではハルキウ Харків、ロシア語名のハリコフ Харьков としても知られる。
- ★48 ジョージア語で თბილისი。チフリス Tiflis とも呼ばれる。ここでは同時代における名称「グルジア」を用いる。

- ★49 秋田の記事は注12を参照。米川の記事の初出は以下の通り。米川正夫「カフカズ雑記」『文藝春秋』一九二八年五月号、二三一〜四〇頁。
- ★50 同前、一〇四頁。
- ★51 同前、一〇五頁。
- ★52 ロシア帝国の「アジア」への視線については多くの研究があるが、代表的なものとして、デイザイド・シンメルベンニク・フアン・デル・オイエ（浜由樹子訳）『ロシアのオリエンタリズム』成文社、二〇一三年（原著二〇一〇年）がある。特にプーシキンら一九世紀前半の文学者によるものについては第四章（八一〜一一八頁）を参照。
- ★53 前掲秋田「カフカズ日記」、二三一〜二頁。秋田が挙げた旅行の参加者のうち、第二章で取り上げるホリツチャー、カザンザキス、イストラテイ、そして第三章で登場するクライン以外について簡潔に説明する。「キンターノ博士」ことアルトゥーロ・キンターノ Arturo Orzábal Quintana（一八九二〜一九六九）はアルゼンチンの左翼知識人。戦間期にはゾオクスを通じてアルゼンチンと連の文化交流に努めた。彼のウクライナ・カフカズ旅行については次を参照。Ávila, Natalia, *Universitarios y cultura de izquierda en la Argentina de los años '20 : La trayectoria intelectual de Arturo Orzábal Quintana*, Bernal : Universidad Nacional de Quilmes, 2017, pp.116-8.
- 「ヘレーネ女史」ことヘレーネ・シュテッッカー Helene Stöcker（一八六九〜一九四三）はドイツの女性運動家・平和運動家。戦間期にはゾオクスを通じて独ソ間の文化交流に努めた。包括的な伝記研究として Wickert, Christl, *Helene Stöcker, 1869-1943*, Bonn, 1991 があつ。

- ★54 本節のホリツチャーの経歴や評価についての記述はフェーンダースの研究に基づく。Fähnders, Walter, „Es geschah in Moskau“ von Arthur Holtscher : in Fähnders, Walter / Klein, Wolfgang / Palth, Nils (Hrsg.) *Europa, Stadt, Reisen: Brücke auf Reisetage 1918-1945*, Bielefeld, S.86-90.
- ★55 カフカ晩年の一九二二〜二四年に執筆。死後刊行された二七年版の題名は『アメリカ Amerika』であった。
- ★56 注53を参照。
- ★57 ホリツチャーの対ソ文化外交における活動については以下を参照。Lersch, Edger, *Hungerhilfe und Osteuropakunde: Die "Freunde des neuen Rußland" in Deutschland*, in: Können, Gerd (Hrsg.), *Deutschland und die russische Revolution 1917/1924*, München, 1998, S.622, 631, I(1928), S.171-201。再録は Holtscher, Arthur, *Reisen*, Potsdam, 1928, S.241-296。本稿では前者を用いる。
- ★58 初出は Holtscher, Arthur, *Das Fest Russland, Die Neue Rundschau* 39-I(1928), S.171-201。再録は Holtscher, Arthur, *Reisen*, Potsdam, 1928, S.241-296。本稿では前者を用いる。
- ★59 Holtscher, Arthur, *Es geschah in Moskau: Roman*, Berlin, 1929
- ★60 *Ibid.*, S.18, 13.
- ★61 Fähnders, op. cit., S.99.
- ★62 前掲秋田「カフカズ日記」、二三二頁。
- ★63 前掲秋田『秋田雨雀日記』（第二巻）、五〇頁。
- ★64 同前。
- ★65 Holtscher, *Das Fest Russland*, S.176.
- ★66 Holtscher, *Es geschah in Moskau: Roman*, S.140.
- ★67 前掲秋田『秋田雨雀日記』（第二巻）四三頁。
- ★68 Holtscher, op. cit., S.146.
- ★69 *Ibid.*

- ★70 *Ibid.*, S. 147.
- ★71 Fahnbers, *op. cit.*, S.101-104.
- ★72 その代表例が、秋田雨雀『ソヴエート・ロシアに於ける宗教問題』鐵塔書院、一九三〇年であろう。本書の内容は、十月革命直後からソヴィエト各地で激しく実行されたロシア正教会への弾圧政策について、ほぼソ連政府の立場に与して正当化するものである。
- ★73 カザンザキスの経歴については主に次の研究に基づいている。
Janinaud-Lust, Colette, *Nikos Kazantzaki : sa vie, son œuvre*, Paris, 1970. 特に共産主義に影響を受けた一九二〇年代を扱った第三章 (pp.181-321) を参照した。
- ★74 カザンザキスの革命記念祭への招待の経緯は不明な点が多い。『トダ・ラバ』の献辞にシュテツカールの名前が最初に挙がっていることから (Kazan, Nikolai, *Toda-Raba*, Paris, 1934, p.3.)、マイツ滞在時代に「新ロシア友の会」に出入りして彼女の知遇を得た可能性が考えられる。この点については別の機会に論じることしたい。
- ★75 イストラティの伝記的研究には次のものがある。Jutin-Klenet, Monique, *Panait Istrati un chardon dévoté*, Paris, 1970.
- ★76 前掲秋田「カフカズ日記」二二二頁
- ★77 革命記念祭直後の二七年二月のソ連共産党第一五回大会では、世界革命路線を唱えていたトロツキーら「左翼反対派」の追放と、国内工業化を優先するスターリンらによる第一次五カ年計画が採択された。その影響はトロツキーと近い立場にあったイストラティとその友人への迫害という形で、また世界革命方針の放棄とソ連国内の官僚化という形で現れた。
- ★78 イストラティの『もう一つの炎に向かって Vers l'autre flamme』第一部 (一九二九年) には、彼の二七、八年のソヴィエト経験が収められている。内容は主に二つに分けられ、一つはロシア国内の旅日記、もう一つは「ルサコフ事件」のルポルタージュである。後者は二九年一月にセルジュの義父のルサコフがソ連国内で不当に逮捕されたことを告発するものである。なお、第二部と第三部は後に、この時にトロツキー派として弾圧されたフランスで活躍した左翼知識人ヴィクトル・セルジュとボリス・スヴァーリンによって書かれたことが明らかになっている。直野敦「パナイト・イストラチとそのソビエト旅行記」『外国語科研究紀要』二六・五 (一九七八)、東京大学教養学部外国語科編、六頁。
- ★79 『トダ・ラバ』の書誌状況について簡潔に触れる。本作はソ連からドイツに戻った一九二九年から執筆され、その一部は三一年、フランスの雑誌 *Revue des Vivants* に掲載されたという。Janinaud-Lust, *op. cit.*, p. 306ff. その三年後、*Le Cahier Bleu* シリーズの第一四巻目として完全版が出版された(ニコライ・カザンの名前で)。Kazan, Nikolai, *op. cit.*. 本作は彼の死後、妻エレニによって序文が付された上で再版された。Kazantzaki, Nikos, *Toda-Raba, Moscou a été Romant*, Paris, 1962. 本稿では同時代史料である三一年の版を用いる。
- ★80 前掲秋田「カフカズ日記」二二三八頁。
- ★81 前掲秋田『秋田雨雀日記』(第二巻)、四二頁。
- ★82 同前、四三頁。
- ★83 Georgiadou, Eleni, *Nikos Kazantzaki et la culture française*, (dissertation *Littérature*) Université d'Avignon, 2014, pp. 221-22.
- ★84 Kazan, *op. cit.*, p. 6
- ★85 *Ibid.*, p. 6-7.
- ★86 本作を含む震災後に作られた一連の戯曲は次に取められた。秋田

- 雨雀『骸骨の舞跳』叢文閣、一九二五年。
- ★ 87 前掲藤田『秋田雨雀研究』、六〇～一頁。
- ★ 88 *Ibid.*, p. 240.
- ★ 89 『ラヂオ・ラボ』にも見られるように、アジア・アフリカの民族運動への高い関心を抱いていたカザンザキスは一九三五年に日本・中国を旅行し、次のような旅行記を出版してゐる。Καζαντζάκης, Νίκος, *Ιερωνύμα - Κνωσ, Αθήνα: Πυροσός, 1938* (初版)。その一部の邦訳は以下の通り。ニコス・カザンザキス(藤下幸子訳)『日本中国旅行記』より、『プロレタリア』二四号(二〇一八)、日本ギリシア語ギリシア文学会、一四一～一二四頁。
- ★ 90 前掲秋田「カフカズ日記」、二二三頁。
- ★ 91 Καζαντζάκης, Νίκος, *Ταξιδιωτικὸς Ποιητὴς, Εξδόσεις Καστανιώτη, Αθήνα, 2010, Σ.245, 251.*
- ★ 92 前掲秋田「カフカズ日記」、二三二頁。
- ★ 93 同前、二三二、二三六頁。
- ★ 94 同前、二三三頁。
- ★ 95 二〇世紀の世界的なエスペラント運動については、リンスによる古典的な研究(リンス、ウルリッヒ(来栖継訳)『危険な言語』岩波書店、一九七五年(原著一九七三年))が挙げられる。ロシア及びソ連、ドイツ、バルカン地域、中国、日本に焦点を当てた本書は、冷戦終結後に利用可能となった史料の反映によって、大幅に加筆・修正された。Lins, Ulrich, *Dangerous Language vol.1/2*, London, 2016/2017. 国際連盟及び国際共産主義運動との関わりについては、同書第一巻の pp. 47-62, 157-277. なお、本稿での戦間期までのエスペラント運動史の概説については本書全体の記述を参考にした。
- ★ 96 コミンテルンとエスペラント問題についてはファイエの研究がある。Fayer, Jean-François, *Eine internationale Sprache für die Weltrevolution ? Die Komintern und die Esperanto-Frage, Jahrbuch für Historische Kommunismusforschung* (Hrsg. Hermann Weber & Eibert Jahn) Berlin, 2008, S.9-23.
- ★ 97 ヴァシリイ・ヤコヴレヴィチ・エロシエンコ(一八九〇～一九五二)はウクライナ出身のエスペラントイスト・作家・教育者。幼少時に失明、モスクワの盲学校で学んだ後、エスペラントを通じて世界を旅する。日本の視覚障害者の教育に興味を抱いて来日、多くの文化人と交流を深め、自らも日本語での創作活動を行った。ソ連帰国後は盲人教育に一生を捧げた。エスペラントイストの高杉一郎によって主要な作品が日本語に翻訳され、『エロシエンコ全集』全三巻(みすず書房、一九五九年)として出版されている。
- ★ 98 前掲秋田『五十年生活年譜』、四八～九頁。
- ★ 99 秋田のエスペラント界隈での評価については、柴田巖・後藤齊・峰芳隆編『日本エスペラント運動人名事典』ひつじ書房、二〇一三年、五～六頁。他の項目よりも相対的に多くの記述が割かれていることから、同界隈で重視されていることが分かるが、一方でエスペラントでの創作的な文章は執筆していなかったという指摘もある。秋田が編集に関わった参考書は、秋田雨雀・小坂猶二『模範エスペラント独習』叢文閣、一九二三年。
- ★ 100 前掲秋田『秋田雨雀日記』(第二巻)、四五頁。
- ★ 101 「オーストリアのエスペラントイストで二十年間労働者の教育に従事してゐる人」とある。前掲秋田「カフカズ日記」、二三一～二頁。
- ★ 102 前掲秋田「カフカズ日記」、二三四頁。
- ★ 103 秋田は、同じくエスペラントイストとして活動していた守随一と

須々木要に三つの戯曲をエスペラントに翻訳させて、日本エスペラント協会から出版している。Akita, Ujaku, Fono de sudjoj; Danco de skeljoj; Noko ĉe landolimoj, Tokio, 1927.

★104 前掲秋田『五十年生活年譜』一三四頁。

★105 前掲秋田『秋田雨雀日記』、四六頁。

★106 前掲秋田『若きソウエート・ロシア』、一〇二―一〇八頁。

★107 Holtscher, Das Fest Russland, S.191-192. なお、一九二〇年の第二回

コミンテルン大会では使用言語と翻訳の問題が提議されていた。

重要文書はドイツ・フランス・ロシア・英語に翻訳されていたが、

同時通訳には支障をきたしていたという。Fayer, op. cit. S.10.

★108 とはいえ、その理由は秋田自身の専門知識の欠如のみ求められる

のだろうか。一九二七年時点でソ連に関する情報や訪ソの経験をも

有していたホリツチャーやカザンザキスは、秋田よりも早期かつ

大量に現地の社会情勢にアクセスする環境に恵まれていた。そし

てその環境を生んだ要因は、日本とドイツ、ギリシヤのソ連との

国交回復やソヴェト文化の受容の時差にあると考えられるが、

本稿ではこれを論じる余白がないため、指摘にとどめておく。

★109 日本側の史料について、日露芸術協会からは一九二五年八月から

二十九年一月にかけて会報『日露芸術』（最初の番号は『日露芸術協会々報』が計二四号発刊され、それ以降も『ソウエート芸術』

といった後継誌が続いている。

※ カザンザキス及びビストラテイに関する背景知識やテキストに

ついては福田耕佑（京都大学文学研究科博士後期課程）及び會

我篤嗣の両氏から、またカザンザキス『トダ・ラバ』の三四年

版のコピーの入手については貝原伴寛氏（東京大学総合文化研究科博士後期課程）の協力をいただいた。この場を借りて篤く御礼申し上げる。なお、本稿の欠陥及び誤謬の責任は全て論者にあることを付す。

よしかわ・ひろあき（総合研究大学院大学文化科学研究科）